
遠い秋の日

石川 良輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠い秋の日

【Nコード】

N9820C

【作者名】

石川 良輔

【あらすじ】

男子高校生の失恋をサンドイッチで書きました。ちょっと自伝的です。

近ごろはどんなにお気に入りの音楽を聴いても、どんなに面白い番組を観ても憂いが無くなることはない。今の自分がこの前国語の授業で習ったばかりの「檸檬」の主人公にやけに似てることに苦笑しつつ、檸檬を手にとってもやはりそれは心の真ん中に居座り続けている。そんな自分がおかしくて苦笑とは違う笑いがこみ上げてきた。もう秋の終わりであるのに高校三年生である自分の成績が思うように上がらないことでも、仲の良かった友人と勉強という口実をつけられ距離を置かれていることだけでこの問題を片づけるのにはあまりに簡単すぎる。もちろんそういうことも原因として挙げられるが、一番の理由は他にあったのだ。

瞼を閉じるとある人の顔が浮かんでくる。その途端にあの人との思い出を巡る超特急の旅に誘われて、何とも言えない気持ちになる。特に夜になると旅は長期化する。同じところをグルグルと回っているのだが、一向に終わらない旅。そのお陰で寝不足も甚だしい。旅をしていて思うことは、一年以上一緒にいたのに意外にも思い出が少ないこと。毎日の登下校。いつからか一緒に食べた同じお弁当。初めてのデートで乗った「花火みたいな大きな観覧車」。広大な海に落ちていく太陽、同時に、街や僕らに迫りくる闇。今思えば、最後のデートで見たあの景色はまるで自分たちだった。

「海が見たいの」

あまりにも突然だったので私は聞き返してしまった。

「私、海が見たいの」

やはりあの子はそう言った。あの子の願いは私の願いだから、電車に飛び乗って最寄りの海に向かった。朝から例の観覧車がある遊園地で遊んで疲れていたが、私はあの子と少しでも長くいられる、と思いき嬉しくなった。電車の中でそつとあの子の横顔を見ると、目が

輝いているのがわかった。パツチリした目であるから分かりやすい。しかしそれがあの子の特徴であった。私はあの子と話すときには、あの子の目に映っている自分の顔を探す。あの子と同じものを見ている気になり、そこに些細な喜びを感じるのだ。

僕を動かしていたのはそういう些細な喜びだったのかもしれない。あるいはそれをあの子はそれと違っていないような。しかしあの子も私が気に留めないようなことに喜びを感じていたはずである。そういう些細なズレがあったから二人は二人でいられたのだ。そのちよつとの距離を埋めるために二人は寄り添い手をつないだりした。でもその距離を埋めすぎてしまったのだろう。あの子のことを外から見られなくなった。私はあの子の中に入ってしまったのだ。だからあの子のことはとてもショックでいまだに立ち直れない。

その日は隣町でお祭りのようなイベントが開催される日だった。私はあの子とそれに行く約束をその日の一週間ほど前に交わし、その日を待っていた。午前10時、隣町の駅前が約束の内容だ。なぜ隣町かというと、その隣町は私にとってのことであり、あの子にしたら3、4駅向こうの駅であったため、「何分の電車で合流」とするより面倒でなく何より「待つ恋」・「待たせる恋」も風情があつて良いかなど思ったからだ。隣町はあまり拓けておらず、駅前もロータリーの向こう側にコンビニがあるくらいだった。私は舞い上がっていたらしく予定時刻よりも30分も前に隣町の駅に着いたのでコンビニに入り、雑誌などを読んで頃合いを見計らった。何の雑誌を読んでいたのかは全く覚えてないが、とりあえず雑誌を読んでいたことは覚えている。予定時刻5分前に店を出て駅前に立っていた。電車は10分に1本来るくらいの頻度で、さっきの電車に乗ってきた人が駅を出て、辺りは少し閑散としていた。駅の前に停まっている5台程度のタクシーの運転手は客が来ないことを確信しているのか、前のタクシーに話しに行ったり、最後尾の運転手は椅子を倒して寝ていたりした。誰かを待っているが特定の人を待っていない彼らを前にして、特定の人を待っているが誰かを待っていない私はやけに

彼らが羨ましく思えて仕方なかった。そんなことを考えてる間に予定時刻の電車が到着したらしくパラパラと人の流れが出来てきた。私は目を凝らしてその流れを見ていたがあの子の姿はなかった。私は少し怒りを覚えたが、何かあつて乗り遅れたのだらうと思つて次を待つことにした。

次の電車が来るまでの10分間はとても長く感じていた。何度も携帯電話を確認しても電話やメールはきてなかった。そろそろ我慢の限界、というときに例のようにパラパラと人の流れが出来始めた。しかしあの子の姿は私には確認できなかった。次の電車もその次の電車も待ったが、ついにあの子は現れなかった。やっと出した力で携帯電話を開き、あの子に「どうしたの？」と送ろうとしたときだった。私は頭を殴られたような感覚に襲われた。

（そうか、そういうことだったのか！）

私の予想通り、画面には「宛先を確認ください」のメッセージが表示された。私が思いつきり息を吸おうと顔を上げると、タクシーは駅前からすでに消えていた。

私はハッと我に返ると、机の上の参考書を読み始めた。アンダーラインを引こうとペンケースから赤いボールペンを取り出したがインクが切れていることを思い出した。少しの葛藤の後、ボールペンを買うに行くことを決めた。外はもう夕方なので寒そうであった。外に出るにはあまりにみつともない服装だったので洋服筆筒を開けた。当然、あの子とお揃いの服が目に入る。自分がカーッと熱くなるのが分かった。

（どうしようかな。着ちゃおうかな。そうだ、着ちゃおう）

私はお揃いのパーカーを身に纏い、恐る恐る外に出た。外は思ったより寒く、私の肌を突き抜けていた。

「もう冬なんだなあ。」

という言葉が私の口をついた。

（そうだ、もう秋は終わりだ。冬が来るんだ。）

私は思いついて息をゆっくり吐いてみた。やはり息は白かった。そ

れを見てようやく「もう冬なんだなあ。」という言葉を受け入れられた。その瞬間、「私」が私の憂いをなんだかひどくくだらないものとして見るようになった。

「もう冬なんだなあ。」

と、もう一度大きく息を吐き出して、普段より少し大きな歩幅で歩きたした。歩

きながら、昨日までより明度が上がった街に気がついた。

（後書き）

読んでいただきありがとうございます。よろしければ評価お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9820c/>

遠い秋の日

2010年10月9日22時20分発行